

RITA

利他の心で

教育を変える

仕事がおもしろくなる

vol.

8

スクール・ フィロソフィの 実践

Education of Philosophy

利他のDNAを
世界へ、
そして未来へ

R
RITSUMEIKAN

立
命
館
RITA
LABO

男女別の「研究室」。空間のどこにも、教壇はありません。それどころか、先生がどこにいるのか、すぐに見つけることさえ困難です。実は先生は、子どもたちに交じって机を並べ、先生自身も研究活動をしています。



「スクール・フィロソフィの実践①」

子どもたちが「生き方」を創っていく、学びの共同体。

暁星国際学園 ヨハネ研究の森コース

取材・執筆／倉石寛（立命館大学稲盛経営哲学研究センター副センター長）
金井文宏（立命館大学稲盛経営哲学研究センター RITUALABO 代表） 奥野美里
写真／浜田智則

キーワード①

〈自学〉

教えないのに、
なぜみんな学ぶのか？

千葉県木更津市にある暁星国際学園ヨハネ研究の森コースは、自らの



は不十分と言わざるを得ないでしょう。2020年度に導入される新学習指導要領でも、一斉授業へのアンチテーゼとして、アクティブラーニングやプロジェクト学習の導入が進められています。

一方、ヨハネ研究の森コースでは、知識を伝える一斉授業は行わず、専門書や教科書をもとに自ら学ぶ「自学」によって、知識を身につけていきます。教える人がいないのに、なぜそのようなことが起こるのでしょうか。「場とプロセスのデザイン」という観点から、ヨハネ研究の森コースの学びを考えてみましょう。

研究員（生徒）と主任研究員（先生）が、机を並べて「研究」する。

ヨハネ研究の森コースの学びの拠点は、教室ではなく「研究室」です。入ってまず驚くのは、その不思議なレイアウト。生徒たちの机が一方方向を向いた、いわゆるスクール形式ではないどころか、数人が机を合わせたグループワークのスタイルでもあります。一人ひとりが「自学」しやすいレイアウトを、子どもたちと先生が一緒に考えています。

子どもたちはそれぞれ机に向かい、自分が探求したいテーマの本を読んだり、考えをまとめてノート

その空間には、教室もなければ、教壇もない。周囲を本棚がぐるりと囲み、緑が生い茂っている。それはかつて修道院にあった大きな図書室のよう。子どもたちの机は、一方方向を向いていない。繋がってはいるが、ワークのためのグループではないようだ。彼らは、思い思いに本を読み、考え、ノートを作っている。

先生は…？ 制服に交じって、大人の姿が見えた。本を読み、思いを巡らせたり、時には子どもたちと会話している。

ここには、先生、生徒という垣根がない。彼らはみんな「研究員」であり、それぞれが自らの切り口で、共通のテーマを研究する同志なのだ。

学びのモチベーションを始動させるのは「セッション」。大学の教授など専門家と自分たちの先生とのやりとりから、知的探究活動に火がつく。そして、寮に戻ってから彼らの「セッション」は続く。

彼らはここで寝食を共にしながら、何を学び、どんな成長を見せるのでしょうか？



キーワード②

対話

対話を通して相互に理解し、知識を再構築する「セッション」。

ヨハネ研究の森コースで、「自学」とともに重視されているのが「対話」。学年を問わず全員が参加する「セツシヨン」と、教科ごとに行う「ゼミ」が、その実践の場となっています。

セツシヨンでは、専門家の話に対して主任研究員（先生）が問いかけるやりとりを契機に、子どもたちも専門家に問いかけをし、自分なりの理解を構築していきます。毎回白熱し、予定時間通り終わることはまず

「教えない」のに「変わる」。

授業時間を超えて学び続けられること。尊敬する先輩のすべて—関心、

ないといいます。13時にスタートし、17時を過ぎるのも当たり前。一般の学校では考えられないことですが、セッションでは生徒が「もっと学びたい」「究めたい」と感じられる瞬間を多く生み出しています。

寮に帰っても彼らは、テーマに関するお互いの理解をやりとりし続けて話し続けます。彼らにとって対話

は、人類や科学への関心と呼び覚まし、生きることの意味を哲学する「知的余暇活動」(学校の語源。ギリシャの「スコール」)なのかもしれません。

作ったりしています。机の上の書籍から、それぞれが今、何に関心を持っているのかが見えてきます。

時折、先生に相談に来る生徒がいますが、その場で答えを教えることはありません。書籍を紹介したり、考えを深める質問を投げかけ、子どもたちが自ら探求する力を育てています。逆に、先生が子どもたちから学ぶことも多いと言います。

ひとつのテーマを教科・学年の枠を超えて全員で研究する。

一般的な学校では、知識を教科ごとに分け、学年を積み重ねて教えることが主体となっています。それは知識を効率的に伝えるという意味では有効でしたが、現実の生活とどのような関わりを持っているのか、課題を解決するうえでどのように役立てることができるのか、生きることと有機的につなげて考えていく力を育てることは難しいでしょう。

ヨハネ研究の森コースでは、教科ごとに知識を積み上げる従来の学習方法とは逆に、教科を超え、生徒も先生も一緒になって、一つのテーマを探究するという学びを重視しています。2017年度のテーマは「人類史」。大きなテーマは、いくつもの問いを生徒たちに投げかけてくれま

別の学校から転入した当初、「教えられる」ことに慣れた生徒は、「教えない」ヨハネの学びに戸惑います。ここでは「自分」を持つことなしに学ぶことはできないからです。しかし、半年もたつと彼らは、学びの共同体の中で主体的に学ぶようになり、理解を深めて生き方を変えていきます。

「私たちの仕事は、ただ、待つことです」。永森貴子先生は言います。「子どもたちの戸惑いを受け止め、待ち切ることで信頼が生まれ、彼らは安心して、主体的に学び始めることができるのです」。

教育学者の林竹二氏は『学ぶということ』（国土社）で、「学んだことの証しは、ただ一つで、何かが変わることである」と記しています。このような子どもたちの変容こそ、ヨハネ研究の森コースが、本来の意味での学びの場となっていることを表しているのではないのでしょうか。

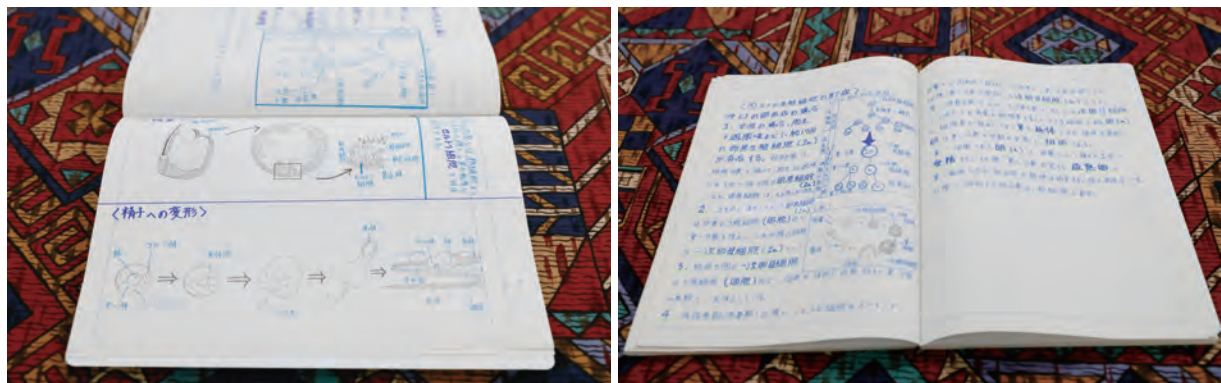


研究室の書籍は、学校側が選んでいるものではありません。子どもたちはそれぞれ自分専用の本棚を持ち、自分が読みたい本を並べています。



す。ここでは教科ごとの知識は、その問いに答えを出すためのツールとなります。そして、「答えを知りたい」という欲求から、彼らは膨大な書籍を読み、比較・検討し、教科を横断して自分なりの答えを見つけていきます。教科ごとに分断された知識を結び直し、課題解決につなげる方法を実地で学んでいるのです。

学びが深まると同時に、根源的な問いも生まれてきます。それは、生き方、哲学と関わる問いです。「自分とは何ものか?」「人間とは何か?」。ヨハネ研究の森コースの生徒は、日常的に「生きることの意味」を自分自身に問いかけています。そして、その答えを探究するために自ら当事者性を持つて学んでいるのです。



ノートづくりは自学の基本です。専門書や教科書をもとに自らの学びをノートに構築していき、知識を血肉としていきます。

「学びの共同体」のつくり方。

インタビュー／倉石寛
協力／笠原正大（ヨハネ研究の森コース主任研究員）

ヨハネ研究の森コースができるまで。

倉石 ヨハネ研究の森コースは、どのような経緯で創設されたのですか？

横瀬 実は原型は仙台市利府にあります。公共用地の使い道について相談を受けた際に、受験や勉強を強いるのではなく、子どもたちの学びたいという気持ちを育てる塾のようなものをやればいいと提案しました。すると、「つくってほしい」と言われ、細切れの学校の授業に適應できず、学びを極めたいという子どもや、集団主義のクラス運営のために不登校になっている子どもを集めた新しい私塾をつくることになりました。

私は以前、アメリカのカリフォルニア大などで、学校や社会教育などの教育機関の創立に関わるアドバイザーをしていました。その時に得た「学ぶ」ということの根本は『知的な余暇活動』である」という実感から出発したかったです。余暇活動といっ

ても、余技ではなく人生の肝心なところに関わってくる活動です。

そして、1996年、利府にオープンしたのが、「ネオアレックス」という私塾でした。関係者から注目され、たくさんの方が視察に来られました。子どもたちがカントを読んだり、原書を広げていたり、本を山積みにしていろいろと学んでいる姿に、みなさん驚かれましたよ。

倉石 そこに暁星国際学園の田川理事長が「グローバルゼーションが進む現在こそ、かつて宣教師たちが小さな部屋を借りて、寺子屋のように子どもたちを育てようとする学校をつくりたい」とやって来られたのですね。

横瀬 はい、ただ私の構想する学校の形は、文科省に認められるものではないだろうと当初は考えていました。しかし、ちょうどその頃、「教育特区」という制度が作られ、日本国内に新しい教育の場を作ろうという気運が高まりました。そして、文科省が「既存の学習指導要領の枠を超

えて、総合的な学習の時間を全く新しいアイデアで展開するもの」と関心を持ってくれ、研究開発指定校となりました。

こうして2001年に暁星国際学園の中に学生寮を持つ「ヨハネ研究の森コース」が誕生したのです。

生活のすべてを考える。

倉石 設立にあたり、どのようなことを考えられましたか？

横瀬 学ぶということは何か、それが機能する空間とは何かを徹底的に考えました。昔と違って現在は、外食したり、コンビニで弁当を買ってきたり、家事も代行サービスを利用したりして、生活の場で学ぶということがなくなってきました。そして、学校で学ぶことも日常の生活とつながっていません。生活世界のモノやヒト、コトとの関わりとは関係なく、学校での知識が組み上がっていくだけなんです。

ヨハネでは、彼らの生活の中で学びが活かされることを重視しています。そして、そこから自分なりの理解を形づくっていききたいと真剣に耳を傾けてくれるのです。

コーディネーターの役割。

倉石 今日は卒業生の姫岡さん（P9）のセッションを見学させていただきましたが、微生物の動きを数式で説明するという内容は、子どもたちにとって決して理解しやすい内容ではありませんでした。コーディネーターとしてはいかがでしたか？

横瀬 姫岡君がしゃべっていたことは確かに難解でした。しかし私は、子どもたちに向けてわかりやすくするための媒介はしていません。媒介者である私の関心や好奇心に基



コーディネーターを務める横瀬先生。

す。だから私は、自分が理解できるところから姫岡君に問うていきました。その答えを聞いて、子どもたちも理解が進み、今まで考えてこなかったことをどう考えればいいのかわかってきます。専門家とコーディネーターのやりとりを聞く子どもたちが、どんどんその学びの世界に引き込まれていく。そのような場をつくることこそ媒介者の役割なんですよ。

倉石 学びと生活が密接に結びついていること、主任研究員である先生と研究員である生徒が学びの共同体となっているからこそ、学びへの高いモチベーションが持続していることがよくわかりました。ありがとうございました。



子どもたちも臆せず、専門家に質問をしています。

活のすべて、そして生きることについて考えています。

共に学ぶ「干潟」をつくる。

倉石 ヨハネは「学びの共同体」だと言われますが、その核となっているセッションについて教えてください。

横瀬 私は長年、理解というものがどのように成立しているかについて観察してきました。そして、人が新たな考えを取り入れたり、学習するということは、「片方に何かがあつて、もう片方へ送り込む」という知識伝達のあり方とは異なることに気づいたのです。ヨハネのセッションやゼミでは、参加者同士がお互いの理解



セッションでは、子どもたちは専門家の話に真剣に耳を傾ける。

「学び方」を学んだヨハネ。 研究者の道は中2から。

卒業生（ヨハネ3期生2003年入学）
姫岡 優介さん インタビュー
4月よりデンマークのニールス・ボーア研究
所研究員（東京大学大学院総合文化研究
科博士課程修了）



ヨハネでは本質的な問いを立てて学び、議論の出発点の叩き台になるところを身に付けました。年間の研究テーマ、例えばヘレン・ケラーにしても、彼女が「water」という言葉を発見するところまでで1年は終わる。ゆっくりと深く物事を学んでいきます。

ヨハネといえば自学やセッションですが、実は授業以外のインフォーマルな時間に、年間研究テーマなどについて、生徒間で学びのやりとりがいっぱいあります。先輩―後輩ではなく、上級生に金魚のフンのようにつきまとい、学びの内容や学ぶスタイルを身に付けていきます。私は野口さんという上級生とずっと一緒にいました。彼の買う本を買い、メモの取り方を真似し、彼の部屋に入り浸りました。「まなぶ」は「まねぶ」から始まるので。そして、セッションの前日に「横瀬先生はこういう話をするんじゃないか？」「先生はあの本を読んでもらうのだ」と話し合っていました。

ジョン万次郎が年間研究テーマだった中2の時、「彼がなぜ南島へ流されたのか」をテーマに100ページの論文を書きました。実は、通常の黒潮の流れでは南島には漂着しないんですね。でも、その年は黒潮が蛇行していたので、うまい具合に南島へたどり着き、アメリカの捕鯨船に助けられて米国へ行きました。私は黒潮の流れがなぜ起こっているのか、なぜ時々蛇行するのかを探求して論文を書いたのです。その過程で、コリオリの理論（物理学）を勉強しました。論文を書き上げたとき、「中2の今、ここまで来ることができた。次はもっと研究するぞ」という気持ちになりました。

私は大学入試に対応するようなペーパーテストの訓練はまったく受けたことがありません。しかし、新しいものに出会って、吸収する力は十分あると思っていましたので、大学入試に対する不安はありませんでした。

ヨハネでは、学びを自分の中に落とし込み、いかに血肉にするかを重視していました。だから、考えていることを書き言葉にして出す、つまり文章を書く訓練はかなりしていました。そうして既知のことからアナロジーで研究していくことを学んだのです。その過程で、学びの勘所はどこにあるかを見つける力が養われました。

“生活こそが学び”

前の学校では、「花はこう咲きます」といった知識や答えの導き方を教わってきました。でも「根っこ」の部分、どうしてこのようになっているのか、このように咲くに至ったプロセスはわかりませんでした。ヨハネでは、ハウツーではなく根の部分、どうしてそうなるのかを日常の中で考えていくことを大切にしています。それは自分の生きていく道を考える場合も同じです。方法ではなく「どのように生きていくか」を考えるようになりました。つまり、生活こそが学びなのだと思います。

“自立した個同士で 分かり合う”

一緒に生活していても、それぞれ歩んできた道や出会った人が違いますから考えも価値観も違います。意見が衝突することもあります。でも、意見の押しつけはありません。そう考える根拠を聞いていくと、なるほどと思うところがあって、自分の考えが変わるときもあります。日々の行動や判断についても、どのような哲学や生き方からそれが出てくるのかを分かり合うようにしています。一緒に生活していますので、分かり合えずにいるのは辛いですから。

向き合う営みとも言えます。その中で、自分が本当に好きだった分野、ずっと関心を抱いてきた学びが現れてきます。人工知能を目指した彼も、ヨハネでは哲学に関心を持つてきましたが、小さい頃から好きだった自然科学系が生きて行く道として浮かび上がってきたのだと思います。

倉石 私たちが生きていかなければならない社会に対峙し、主体的に自分事として関わっていく、今まさに求められている18歳像を見た思いがありました。

ヨハネ生たちは、 何を考え、 何を学んでいるのか？



“学びは授業では終わらない”

私たちの勉強は授業時間で終わりません。学びはずっと続いています。それは生き方を考えているからです。私たちはここで生き方を学んでいるんです。授業で知識を学んでいるのではないのです。ヨハネでは授業と生活は切り離されたものではなく、学ぶことと生活が結びついています。寮に帰ってからでも、本や映像などについて、「こんな切り口もあるね」などよく議論をします。自分が考えていることをみんなで述べ合います。食事のときでも議論は始まります。お菓子やお茶が出るときもあれば、先生に相談してきちんと準備してやる場合もあります。議論には、中高生だけでなく、小学生も参加します。私はそれで振り返りというものを自然に学んでいった気がします。学びへの振り返りは本当によくやります。空いているときは先生も参加されますが、企画も含めて生徒が自主的にやっています。

“聞く力——深いところに向かう”

私たちはその人の言葉ではなく、その人が言葉で何を伝えたいと思っているのか、言葉の奥にある見えない部分を聞き取ろうという姿勢で聞きます。一緒に生活している中で、その人の生きてきた道、さらには言葉だけでなく、身体全体の人の他者への接し方や物事への向かい方など、身体全体から読み取っていく感じです。ヨハネでは日常生活の所作を通じての学びがあるように思います。入っていくというか、全体を通じて学んでいく感じです。例えばウォーキングでも、意味を聞くよりはまずはやってから考える。身体で感じていく方法もあると思いました。

社会と向き合い、 進路を選択。

ヨハネ生 僕は人間関係について考えてきて、そこを研究するために慶應大学で政治学を学びます。

ヨハネ生 僕の場合は哲学に関心を持ってきたのですが、人間とは何かを問うていくうちに、関西学院大学で人工知能の方から人間というものにアプローチしたいと考えるようになりました。

笠原先生 ヨハネでは生徒の進路について、生徒・教員・保護者による話し合いをします。一回3時間、それを数回から十数回、本当に何回も熟議します。その話し合いの内容は普通の学校とまったく異なり、個人の成績や大学案内、偏差値などまったく登場しません。これからどのような世界になっていくかを話し合い、その共有の上に、その世界の中で自分が成し遂げられる範囲を考え、そこから自分が学ぶ方向を見出していくという過程をたどります。それは自分をとり巻く社会と、自分自身に



ブランド戦略講座の後、海外探求研修時に利用したJALのホスピタリティについて分析し、それを踏まえ、JALに提案を行うという実践的な課題解決型学習になっています。

グローバル企業にプレゼン。
今年のテーマはキャッチコピー。

2017年度の「企業研究総まとめ」のメインテーマは「JALの

グローバル企業にプレゼン。
今年のテーマはキャッチコピー。

「キャッチコピー」の提案。2018年2月21日に、JALへの提案を行うプレゼンテーションの授業が実施されました。生徒たちは実際に海外探究研修でJAL便に搭乗してわかったことを、グループごとに「機内食」「ホスピタリティ」「機内でのこと」「JALへの提案」の4つの視点から分析し、最後に広報のための「キャッチコピー」として発表します。

プレゼンテーションには、キヤッチコピーとともに、なぜそのコピーを考えたのか、背景や分析結果も盛り込まれます。1グループ3分の持ち時間で、簡潔に要点を押さえながら、楽器あり、踊りありと、それぞれに工夫を凝らした発表を行いました。

審査を担当するのは、1年次の研修から海外探求研修時の搭乗までをフォローしてきた日本航空株式会社社員の社員3名と、教諭1名の計4名。

「この企画について、もう少し詳しく聞かせてください」「この機内食のコスト計算はしています

審査を担当するのは、1年次の研修から海外探求研修時の搭乗までをフォローしてきた日本航空株式会社社の社員3名と、教諭1名の計4名。「この企画について、もう少し詳しく聞かせてください」「この機内食のコスト計算はしています

「この企画について、もう少し詳しく聞かせてください」「この機内食のコスト計算はしています

「JALキャッチコピー」審査結果

1位

SAFETY COUNTRY ROAD ～安全な故郷への道～

2位
食で支えるJAL～働くあなたのために～

3位
夢の始まりへお届けします～安らぎのひとときと共に～

特別賞
座席でできる体操動画プログラムの提供を提案



優勝グループはギターを弾きながらのプレゼンテーションで強い印象を残しました。

最優秀賞を受賞した生徒の声

キャッチコピーは、ターゲット層を日本に住んでいる外国人の方たちに絞ったことから思いつきました。「COUNTRY ROAD」とは、故郷を懐かしく思う気持ちを歌った世界的に有名な曲の名前で、私たちが考えたターゲット層にぴったりだと思いこの言葉を選びました。「SAFETY」という言葉は、JALさんの企業理念に込められている「世界一の安全性」という思いを強調したかったために選びました。私たちは、1年生の「企業研究」から JAL さんのことについて学んできました。今回のプレゼンは、今までの総括でもあります。JAL さんへの恩返しでもあります。出来る限りのことをしようとプレゼンの方法にもこだわりました。考えた結果、ギターを使い実際に「COUNTRY ROAD」を弾くことに決めました。そうすることでキャッチコピーの印象を強く伝えることができると考えたからです。実際に JAL さんへプレゼンをさせていただくという経験はとても貴重であり、今までの「企業研究」も含め、学んだことがたくさんありました。それらを生かし、将来につながっていきたいと思います。



た学習プログラムです。

1 学年から3 学年前期までの2 年半の間に段階的に学んでいけるよう、工夫を凝らした「序」「論」「活」「究」「夢」の5 単元のカリキュラムが設置されています。その中から、ビジネス探究科の「JAL 研修」と、すべての探究科が取り組む「市役所プラン」を紹介します。

「考えよ」というシンプルかつ力強いメッセージを校訓とし、探究にフォーカスした取り組みを行っています。学びの中核に位置づけられているのは、総合的な学習と情報の授業を統合した課題解決型学習の「究タイム」。自ら課題を見つけ、関連する情報を収集・整理・分析し、そこで明らかになった考えをまとめ、表現することを目的とした学習プログラムです。

1 学年から3 学年前期までの2 年半の間に段階的に学んでいけるよう、工夫を凝らした「序」「論」「活」「究」「夢」の5 単元のカリキュラムが設置されています。その中から、ビジネス探究科の「JAL 研修」と、すべての探究科が取り組む「市役所プラン」を紹介します。

ビジネス探究科 × JAL
JAL 研修

プロジェクトⅠ
ビジネス探究科 × JAL

2012年8月、日本航空に一本の電話が入りました。「日本航空を高校生の研修の対象にしたい。経営ビジョンの話をしてほしい」という富士市立高校の先生からの依頼でした。当時、JALは企業再建の真っ最中。一方、富士市立高校は富士市唯一の市立高校として、生き残りをかけた授業カリキュラムの改変に取り組んでいるところでした。地域と密着しながら愛郷心を育てていかなければ、地域から若者が流出してし

現場に学び、分析し、提案
2年かけて取り組む。

「考えよ」。本気のプロジェクトが子どもたちを変える。

コミュニティハイスクール・富士市立高等学校



取材・執筆／金井文宏（立命館大学稲盛経営哲学研究センター RITLABO 代表
谷口悦子（立命館大学稲盛経営哲学研究センター RITLABO 担当）
松村淳（関西学院大学社会学部非常勤講師）
写真撮影・浜田智則

まいます。そんな危機感を抱えていたからこそ、同様に再起を目指すJALから学びたい、学ばせたいと考えたそうです。

そんな富士市立高等学校の先生方の熱意に応える形で、JALの社員がJALフィロソフィによる破綻からの再生の取り組みを語ってくれることになりました（JALフィロソフィ講話…経営破綻から京セラ・稲盛和夫氏のJAL会長就任、再生までの過程と、再生に大きな役割を果たしたJALフィロソフィによる社員の意識変革について、「一人ひとりがJAL」「最高のバトンタッチ」など、いくつかのフィロソフィを例にした話をするもの）。

当初は一度きりの取り組みとして始まった研修ですが、現在は校外学習の一環とし

る形で、JALの社員がJALフィロソフィによる破綻からの再生の取り組みを語ってくれることになりました（JALフィロソフィ講話…経営破綻から京セラ・稲盛和夫氏のJAL会長就任、再生までの過程と、再生に大きな役割を果たしたJALフィロソフィによる社員の意識変革について、「一人ひとりがJAL」「最高のバトンタッチ」など、いくつかのフィロソフィを例にした）。

がら話をするもの）。

当初は一度きりの取り組みとして始まった研修ですが、現在は校外学習の一環とし

当初は一度きりの取り組みとして始まった研修ですが、現在は校外学習の一環とし

て、1年次の「空港研修・航空研修」2年次の「企業研究総まとめ」をJALがサポートし、2年間の取り組み全体を「JAL研修」と呼ばれるようになりました。「空港研修・航空研修」は、羽田の空港第一ターミナル、機体工場、客室訓練施設を見学し、JALフィロソフィ講話を聞く、東京での実地研修。「企業研究総まとめ」は、JAL



か？」審査員からは、現場に即した質問がどんどん投げかけられます。ビジネス探究科に学ぶ子どもたちに期待し、彼らから学びたいと考えるからこそ、遠慮なく向き合うことができるのでしょう。

人生で大切なマインドや、考え方を届ける授業に。

今後の展開について富士市教育委員会の遠藤健先生は、「JAL研修全体を体系的にカリキュラムマネジメントする必要があると感じています。生徒がこの先の人生で本質として持つべきこと。テクニカルな部分だけではなく、マインド的なことや考え方を一貫して伝えていく必要性を感じています。他社との比較も必要だと感じます。コスト面や会社組織、運営の課題や現状のビジョン等をインプットすることも必要です。ビジネスと社会貢献、持続可能な社会の形成といった切り口ももっと深



JAL社員からのメッセージを載せた掲示板

めていきたいです」と展望しています。

子どもたちの分析や提案を、JALは真摯に受け止め、実現を検討し、その結果を学校に返しています。JALの社員のみなさんから返信されたメッセージは、学校の掲示板に貼り出されています。

プロジェクト② 総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科 × 富士市役所&地域コミュニティ

〈市役所プラン〉

企画研究課で探究学習主任を務めていた遠藤健先生は言います。「『市役所プラン』を終えた子どもたちは、社会の仕組みが見えてきて、何か自分にできることはないかと考え、行動するようになります。自分の住んでいる所だけじゃなくて、もっと大きく社会全体のことを捉える視野が身についているように思います」。

プログラムは「オリエンテーションと事前学習」「調査と解決策検討」「発表と自己評価」の3つの単元に分かれています。第1単元ではまず、市職員としての役割や心構えを、座学を通じて理解し、具体的な地域の

課題について学習します。その後、子どもたちがグループに分かれて市内の10地区に入り、住民インタビューやフィールドワークを行います。ここで最も重視しているのは、地域に長く暮らす方々と密なコミュニケーションをとりながら、地域社会への主体的に関わる姿勢を身に付けることです。

第2単元では、先行事例の調査などを行い、地域課題の解決策を練ります。効果的なプレゼンテーションのやり方を学び、自分たちの取り組みを客観的に、かつきちんと人に伝えるというスキルも習得します。

締めくくりの第3単元では、グループごとに練り上げた課題解決策をプレゼンテーションする探究学習発表会を実施。終了後には半期にわたる活動を振り返り、きちんと言語化できたかどうか、自己評価（リフレクション）を行います。

自分ごとになるから、リアルな提案が生まれる。

コミュニティハイスクールを目指す富士市立高等学校にとって、今や中核となる取り組みの一つとなった「市役所プラン」ですが、導入当初はなかなかうまくいかなかったそうです。「富士市の各課に子どもたちを割り振って所属させたのですが、組織は縦割りですし、市役所の職員も忙しく相手になる時間を十分に取れなくて。それで結局、子どもたち自身に、地域の課題を発見させて取り組んでもらうようにしました」。

その結果、生徒から地域に即したリアルな提案が出されるようになりました。例えば市内西部の天間地区の認知度を高め、地区の活動に参加する若者を増やすために「てんまんじゅう」をつくることを提案したグループは、住民とともにまんじゅうを作ってお祭りでふるまい、多くの参加者から喜ばれました。また、防

災型公園にかまどベンチを設置することを提案したグループは、防災訓練に自主的に参加しています。遠藤先生は次のように総括します。「自分ごととしてテーマが立てられると、思いがそこに乗っていく。思いが加われば、それが愛郷心につながったり、生徒も本気になっていきます。当初、地域住民からは、ホームページやチラシづくりを手伝ってくれるボランティアのように受け止められていましたが、学習の一環であることを伝え、彼らの興味や関心に沿ったプロジェクトとして協力してもらっています。街全体で生徒を育てる。地域に根差した市立高校だからこそ、このような取り組みが大切だと考えています」

2学年の前半に実施する「市役所プラン」は、富士市役所からの辞令で始まる地域密着の体験型学習で

地域コミュニティに子どもたちを送り込む。

す。子どもたちは職員として自分たちの視点で市の課題と向き合い、解決策を考えていきます。

「地域コミュニティの中で、社会で必要な縦の人のつながりや、礼儀なども学ばせたかったです」。当時、



約80人の市民の皆さんを招いての中間発表会。



地域のイベントで、提案した「てんまんじゅう」を販売する高校生たち。



富士市民の案内でフィールドワーク。



学生たちが一生懸命、でも楽しそうに掃除をする姿が印象的。冬には雪かきをすることもあります。

大聖寺谷さんの次のチャレンジは、金沢専門職大学（仮称）です。文科省が専門職大学の制度を設けたのを契機に、そのトップを切って2019年4月に開校を計画。この年、専門職大学は、全国に13校設立を予定されていますが、その多くは医療福祉系で、食関連コースを有する金沢専門職大学（仮称）は異色の存在です。



金沢専門職大学（仮称）イメージ図

国際ビジネス学院は、「全教職員の物心両面の幸福を追求し、専門産業の発展に貢献できる社会人の育成を行う」という経営理念のもと、「利他の心」を軸に学校経営を進めています。そのきっかけは、2009年理事長の大聖寺谷さんの盛和塾への入塾。稲盛哲学での学校経営を志し、実践しています。

「全教職員の幸福」のためにまず取り組んだのが、一般の教職員の残業ゼロ・定時退社、有給休暇消化率100%の徹底などという人事給与方針を貫いています。また、「専門産業の発展に貢献する」ために、即戦力の人材を世の中に輩出することをモットーに、企業との産学共同教育を行っています。具体的には、イオングループのイオンベッ（株）・イオンバイク（株）と国際ベッ（株）と国際サイクル専門学校、美容組合と金沢美専、金沢市内の都市型ホテル8社と国際ホテル&ブライダル専門学校など、グループ8校の専門学校が、関連する企業や団体と提携し、附属専門学校として共同のプロジェクトに取り組んでいます。

さらに、世界のトップパティシエであり石川県七尾市出身の辻口博啓氏を校長に迎えたスーパースイーツ製菓専門学校、スーパースイーツ調理専門学校、カリスマ美容師の野沢道生氏を校長に迎えた金沢美専など、一流の職業人の仕事を身近に見て学べるようにし、子どもたちの夢と技能を育んでいます。

金沢に日本初の専門職大学を。

金沢専門職大学（仮称）の
カリキュラム編成



金沢専門職大学（仮称）では、国際ビジネス学院がこれまで蓄積してきた職業教育をベースに、4年間の大学教育で「経営視点を持つて業務の改善・改革に取り組むことができる経営管理・企画などの能力を有した人材」を育成していきます。

「国際ビジネス学院と同様、企業から求められる『専門力』と『社会力』の養成は必須課題です。特に社会力については、1、2年次に『生き方・働き方・利他の心―I』を基礎演習の授業として開講し、学生たちが稲盛哲学を学べるようにしています」と話す大聖寺谷さん。「盛和塾の稲盛塾長の考え方の基底にある『利他の心』を身に付けて、経営やマネジメントに活かしてほしいと願っています」。



「スクール・フィロソフィの実践③」
職業人教育は、
生き方・働き方・利他の心を
育むことから。
学校法人国際ビジネス学院

学校法人国際ビジネス学院は、石川県金沢市と福井県坂井市で、多くの専門学校を運営しています。国際ベッ専門学校、スーパースイーツ製菓専門学校、スーパースイーツ調理専門学校、国際サイクル専門学校、専門学校金沢美専、国際ホテル&ブライダル専門学校、金沢医療事務専門学校と、いずれも専門的な技術と共に、社会人としての力を養うことを目的とした学校です。その学校経営には、京セラの名誉会長・稲盛和夫氏の提唱する「フィロソフィ」が活かされています。哲学による学校経営への挑戦の模様をご紹介します。

掃除を通して
プロの心構えを伝える。

早朝7時過ぎ、国際ビジネス学院

の朝は掃除から始まります。掃除をしているのは、理事長や幹部職員の皆さん。その後、教員や一般職員も加わり、8時15分には校内が一気に磨き上げられます。授業開始は9時30分。その最初の15分間もやはり掃除に充てられています。学生たちが自身が教室内を清掃し、自分たちが美しくした環境で授業に臨むのです。さらに、月1回、土曜日の午前中に約半数の学生が自主参加して徹底的に清掃を行う「クリーンデー」（大掃除の日）があります。8時30分から11時まで、半日かけて校内の床をすべて拭き掃除をしていきます。この体験を通して、パティシエや美容師、ベットのスペシャリストとなる学生たちは、「床から10センチの距離で清潔にする」というプロフェッショナルな職場の環境づくりを体得するのです。

理事長の大聖寺谷さんは、「掃除・

京セラ、KDDI、JALグループを
哲学経営で率い、盛和塾塾長として
中小企業経営者を育ててきた稲盛和夫氏。
このシリーズでは、社員のみならず、
稲盛哲学をどのように咀嚼し、
自分のものとしているのか、
仕事での実践に基づいたお話をうかがいます。

マイ・フィロソフィ

● 利他の心で働く

● 動機善なりや、私心なかりしか

● 率先垂範する

学校法人国際ビジネス学院 理事長

盛和塾「石川」所屬

だしょうじや

大聖寺谷 敏さん



40歳でサラリーマンを辞めて繊維機械商社を起業し、その後ベクトンショップとベクトスクリールの事業に参入。2004年に、ベクトのトリマー養成スクールを、専門職を育てる正式な教育機関にするために学校法人国際ビジネス学院を設立した大聖寺谷さん。しかし、その経営は順調ではなかったといいます。「学生の就職先からクレームが続いて、専門学校の教育内容と現場で求められるスキルに大きな隔たりがあることに気づきました。事業展開を急ぐ私の経営方針についていけない職員の離職が相次ぐという事態も生じました」。

2007年、学校経営に思い悩んでいた大聖寺谷さんは、書店で稲盛和夫氏の著書『生き方』（サンマーク出版）と出会います。そして、人間が生きている意義、人生の目的は「心を高めること、魂を磨くことにある」という言葉に感銘を受け、専門学校経営をビジネスとしか考えてこなかったことに気づかされたとか。それ以降、事業が壁にぶち当たったり、決断を迫られるときには、稲盛和夫氏の言葉、「利他の心で働く」「動機善なりや、私心なかりしか」と。

学校経営の判断基準とするようになったそうです。
著書との出会いから2年後の2009年には、もつと稲盛経営哲学を学びたいと、稲盛和夫氏が塾長を務める「盛和塾」に入塾。稲盛経営哲学によって率いる学校経営に取り組み始めました。
最も重視したことは、学校のビジョンを明確にすること。入学した学生が「入学してよかった」、企業からは「採用してよかった」と思ってもらえる専門学校を目指すことにしました。「このビジョンを達成するためには『専門力』だけでなく、『社会力』の教育が不可欠です。しかし、社会力といっても幅広い。何を要に社会力を育てるのかを自問自答しました。そして、卒業生の多くがサービス業に従事することを踏まえると、掃除こそ社会力の要だと考えたのです。一流のお店は、隅々まで掃除が行き届いていて、入った瞬間に気持ちよくなるでしょう。これこそ社会力の結晶ではないかと」。



2016年の盛和塾世界大会で、企業人としての自らの歩みと学校経営の成果を発表する大聖寺谷さん。

しかし、学生を教育するためにはまず、教職員が実践し、模範を示す必要があります。そして、教職員に実践してもらうには、経営トツプが自ら実践していなければ、説得力がありません。「理事長である私から『率先垂範で実践する』と決め、誰よりも先に出勤し、一人でトイレ掃除を始めました。すると、そんな大聖寺谷さんの思いが通じたのか、役員の一人が掃除に協力してくれるようになりました。そして、二人で黙々とトイレ掃除を毎日続けていくと、一緒に掃除をしてくれる職員がどんどん増えてきたのです。
大聖寺谷さんが一人で掃除を始めてから5年後、教職員みんなが協力して掃除をするようになりました。今では多くの学生も参加して、「目指せ日本一 元気に挨拶 整理整頓 清掃」を実践しています。

RITA LABO は、稲盛経営哲学研究センターの教育実践研究部門として、利他の心を軸に、教育の未来を切り拓きます。

利他ラボ
RITA LABO

<http://www.ritalabo.jp>



お問い合わせ: contact@ritalabo.jp

facebook [rita labo](#) 検索

発行: 立命館大学 OIC総合研究機構 稲盛経営哲学研究センター RITA LABO(リタラボ) 大阪府茨木市岩倉町2-150 立命館大学 大阪いばらきキャンパス

編集人: 金井文宏 デザイン: 坂本佳子、齋藤直己 2018年3月31日発行